



さかい利晶の杜 開館5周年記念

堺市博物館館長 須藤 健一

さかい利晶の杜は本年三月で開館五周年をむかえました。平成二七(二〇一五)年三月の開館から五年の当館のあひまことに順調なものでした。この間の入館者は一八〇万人に達し、年間二〇万人の当初目標を大幅に越えることができました。

多くの入館者をむかえられたのは、多機能をそなえた公共施設で充実した博物館活動をすすめてきた努力によるものです。当館では、千利休茶の湯館と与謝野晶子記念館の常設展を中心に年三回の企画展を開催してきました。常設展では、利休のめざした茶の湯と近現代の茶道の世界、そして歌人・評論家・教育者・古典研究者として今日につながる晶子の生き方と豊かな芸術性の展示に力を注いでいます。

一方、企画展においては、「千家十職」など利休好みの美と技の伝統や「利晶に探る 与謝野晶子コレクション」など晶子の多彩な創作活動を紹介する展示を重視しています。また、表千家、裏千家、武者小路の三千家の家元にご協力いただき、立礼席の呈茶や茶室(広間)でのお点前体験のサービスも提供しています。そのほか展示解説、講演会、ワークショップ、絵画展なども催しています。

当館エントランスの観光案内展示室には環濠都市堺のフロアマップと中心街のまち並み模型が皆さまをお待ちしています。さらに、館内で新しい発見と知的な刺激を受けてから、当館の隣にある飲食施設でくつろいで利休と晶子について語り合うこともできます。

さかい利晶の杜が伝統ある堺・宿院の地で順調に成長できたのは、ひとえに関係各位のご協力とご援助のたまものと深謝する次第です。今後とも皆さまに親しまれる博物館をめざして多様な活動を展開する所存ですので、さらなるご支援をお願い申し上げます。

学芸茶話

晶子さんのお友達

与謝野晶子には、堺時代に出会ったお友達を回顧した「私の見たる少女」(『新少女』掲載)という作品があります。大正五年(一九一六)、三八歳の時に発表されました。

その中に、小学校のお友達で堺の豪商「山太郎」の娘おみきさんが出てきます。とても聡明な女の子だったそうです。晶子さんがはじめて行ったお友達の家は、お酒を造る匂いがするおみきさんのおうちでした。ほごなく、おみきさんは駿河屋へ遊びに来てくれました。

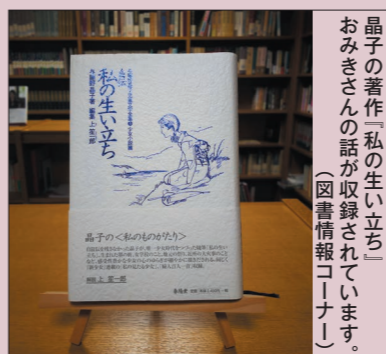
晶子もおみきさんもお昼は学校からいったん家に帰って済ませるグループでした。午後の授業の前の昼休みの時間に、二人で宿院の高燈籠にあがって仲良く遊んだこともありました。

ところで、山太郎とは、一体どのような家でしょうか。利晶の杜の向かいに千利休屋敷跡があるのは、ご存知ですね。ここは、加賀田太郎吉という豪商の屋敷でした。加賀田家は、「大和川」という銘柄の日本酒を醸造していました。そして、屋号を山家屋(やまがや)としました。江戸時代の商家は、屋号と名前を略して呼ぶことが一般的でした。例えば、いまの利晶の杜の駐車場の辺りにあった酒造家の米屋甚兵衛家は、米甚と呼ばれていました。

加賀田太郎吉は、山家屋太郎吉。略したら、山太郎になります。晶子さんのお友達のおうちは、今の利休屋敷跡がある場所にあったのです。晶子は自分の記念館が、おみきさんの家の前に出来たのを驚いているのではないのでしょうか。

(さかい利晶の杜)

学芸員 矢内一磨



ご利用案内

- 休館日** ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、茶の湯体験施設 第3火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始
●観光案内展示室 年末年始
- 開館時間** ●駐車場 年中無休
●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、観光案内展示室 午前9時～午後6時(最終入館 午後5時30分)
●茶の湯体験施設 午前10時～午後5時(最終入席 午後4時45分)
●駐車場 24時間
- 駐車場** ●普通車 1時間200円(1日最大1400円) ※さかい利晶の杜施設利用者に割引があります。
●バス 1回1,000円【予約制】



交通アクセス

- 阪堺線 宿院駅より徒歩で1分
- 南海高野線 堺東駅より徒歩で約6分(宿院バス停下車)
- 南海本線 堺駅より徒歩で約10分 バスで約3～5分(宿院バス停下車)
- JR阪和線/南海高野線 三国ヶ丘駅より徒歩で約10分(宿院バス停下車)
- 阪神高速15号堺線 堺ICより車で約3分
- 阪神高速4号湾岸線 大浜ICより車で約3分

利用料金

区分	大人(大学生含む)	高校生	中学生以下
観光案内展示室	無料	無料	無料
千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館※1 (2館ともご覧いただけます)	300円	200円	100円
立礼呈茶(抹茶と和菓子)	500円	400円	300円
茶室お点前体験【予約制】	500円	400円	300円
さかい待庵特別観覧セット【申込制】 (展示観覧・呈茶含む)	1,000円	800円	500円

※1 常設展観覧料は障がいのある方と介護者、堺市内在学の小中学生と引率教職員、未就学児は無料

編集後記

利晶の杜は五周年を迎えました。堺は世界文化遺産の百舌鳥古墳群だけではなく、茶の湯、文学など豊かな歴史文化をもつ都市です。まだまだ皆様の知らない魅力がたくさんあふれています。今後もそうした堺の魅力、利晶ならではの企画で十二分にお伝えできるよう邁進してまいります。是非お立ち寄りください。(木村)

〈生誕二二〇年 立花大亀と茶の湯 — 三世紀を生きた堺の禪僧 —〉

令和元年9月14日(土)〜令和元年10月20日(日)



平成と令和の節目となった二〇一九年は、堺出身の禅僧・立花大亀和尚（一八九九〜二〇〇五）の生誕二二〇年にあたりました。大亀和尚は、明治、大正、昭和、平成の四つの時代、実に三世紀を生き、近代の禅と茶の湯文化に足跡を残しました。本展では、大亀和尚の活動の軌跡と茶道具を紹介することにより、本展を通して和尚の人となりを知っていただくとともに、堺における茶の湯の歴史とその意義について、理解を深めていただく機会になれば、と考え開催しました。展示は三部構成とし、第一章では堺との交流、第二章では大亀和尚の堺における文化事業の功績をそれぞれ紹介しました。そして、第三章では大亀和尚の制作した茶道具を展示しました。

第一章 潮風が吹く堺に生まれ

大亀和尚は、二〇歳の時南宗寺で得度して以後、堺を離れました。しかし、堺を離れた後も、事あるごとにふるさと・堺の親類や知人に多くの書簡を送っており、ふるさととの交流は途絶えませんでした。

本章では、生家「立花小間物店」の引札や、お中元、お歳暮等季節における親戚への挨拶状を展示しました。僧侶には不要な朱太刀を持って堺を闊歩したという逸話のある、一休宗純の像を描いておこなわれました。その際記念品として頒布された袱紗を今回展示しました。本袱紗は、大亀和尚の監修のもと、一九世紀前半の文化・文政期に盛んになった堺更紗を復元したものです。

利休屋敷跡は、明治三八年（一九〇五）以降辻本家の所有となりましたが、それ以前は酒造業を営んでいた加賀田氏が所有していました。天保十一年（一八四〇）の利休二五〇遠忌を境に、利休帰りの気運が高まりました。堺にもその影響があったものと推測され、加賀田氏は、堺の塩穴寺にあった利休ゆかりの茶室「実相庵」の写しを建立し、茶室披きには大徳寺第四三世で、堺禅通寺第一五世・大綱宗彦を招きました。大綱は茶室に「懐旧」と命名し、その由来を墨蹟に残しました。

本章では、利休屋敷跡における茶室「懐旧」の変遷を明らかにし、関連資料を展示しました。加賀田氏については、学芸茶話の「晶子さんのお友達」も是非参照してください。

第三章 和比とび

晩年大亀和尚は大徳寺重鎮として多忙な日々を過ごす中でも、茶事を楽しみ、信楽の窯元で焼物を制作し、書画を嗜みます。和尚は、謡すなわ



た書簡や、日本を象徴する富士山を描き、山岡鉄舟の歌を盛り込んだ、お歳暮のお礼状等、大亀和尚の筆まめな人柄を映した味のある作品を紹介しました。また、京都の茶舗・奥西緑芳園の包装紙やカレンダーの裏紙を利用した封筒も展示しました。紙は当時貴重品ですが、そうした貴重な紙を再利用するという姿勢に、堅実な生活を尊ぶ堺商人の気質も窺えます。奥西緑芳園は大亀和尚と縁が深く、大亀和尚が命名した抹茶「花橋」を販売しています。今回は企画展に関連して、ショップでも和尚ゆかりの抹茶を販売させていただき、好評を博しました。

第二章 利休帰

大亀和尚のふるさと・堺は、天下の大茶人と称された千利休（一五二二〜九一）の生誕地でもありました。しかし、堺千家を継いだ利休の嫡子・道安の系統は途絶え、さらには慶長二〇年ち謡曲の持つ幽玄と、茶の湯のもつわびが禅に共通するとし、両者の精神性を尊んでいました。本章ではその精神に基づき、奈良県宇陀市にある大亀和尚民芸館が所蔵する、和尚自らが手がけた作品を中心に茶道具等を展示しました。

大亀和尚は、自らが縁のあった奈良県の宇陀の地に、廃寺となっていた大徳寺の塔頭・松源院を再建しました。宇陀の地は万葉の時代、柿本人麻呂が詠じたかきろひの名所となっています。かきろひとは、厳冬の良く晴れた日の朝焼けの現象を言います。和尚はかきろひを詠じた人麻呂の歌をこよなく愛し、書は勿論、朱色でかきろひを表現して描いた作品も数多く残しています。また和尚作の伊賀の水指は、銘はありませんが大振りな深みのあるオレンジ色で、その色合いはまさにかきろひを想像させてくれています。

銘「ひねくれ者」という茶杓は、亀甲竹の節を利用した、節の複数ある作品です。大亀和尚の茶道具には、謡や禅にちなんだ銘がつけられています。この茶杓は、大亀和尚が自身の性格をもじって銘を付けたのではないかと推測されます。他では類をみない茶杓を、皆様興味深く鑑賞されていました。

和泉野窯の茶碗「足つくり」は、足の膝を用いて制作されており、素朴な平の茶碗ながらも見る角度を変えると、いろいろな顔を見せてくれる作品でした。大亀和尚の作品は、わびの精神に基づいた非常に素朴ながらも、和尚の人柄が色濃く残された味わい深いものとなっています。

大亀和尚は、つい一五年くらい前まで生きて多

（二六一五）の大坂夏の陣、昭和二〇年（一九四五）の堺空襲の戦火により二度焦土と化しました。和尚は利休のふるさとであり、「茶の湯の本流」とした堺の地に、「黄梅庵」「伸庵」という二つの茶室、及び利休屋敷跡を新たな茶の湯の名所として創りました。本章では、和尚の尽力によって創られた茶の湯の名所に関する資料を再度見直し、堺における茶の湯の歴史とその位置づけをあらためて知っていただくべく、紹介しました。

黄梅庵は、堺の豪商で利休とともに天下の三宗匠と言われた、今井宗久ゆかりの茶室とされています。近代最後の大茶人と言われた松永安左衛門（耳庵、以後耳庵と称す）が所有した後、耳庵が晩年の居とした小田原に再建し、「黄梅庵」と命名しました。耳庵と大亀和尚は、昭和二五、六年ごろ、二大茶会の一つ光悦会において遭遇したことがきっかけで、交流を深めました。耳庵没後大亀和尚は遺族に働きかけ、堺にゆかりのある黄梅庵を堺市に寄贈してもらうこととなり、小田原市より堺市へ移築されました。

伸庵については、もと東京の道具商・川部太郎（緑水）の所有で、のち福助足袋株式会社の本家が所有することとなりました。辻本家と大亀和尚は昵懇の間柄で、大亀和尚の堺における活動は、辻本家が支援していました。そうした関係から伸庵は、堺市寄贈となりました。伸庵が辻本家に渡ったその経緯については、今回明らかになることができません。今後の課題となりましたが、伸庵の設計者・仰木魯堂及びその弟・政斎は、耳庵とは親しい間柄であったことから、黄梅庵と伸庵は、堺に来るべくして来た茶室、といっても過言ではない



茶杓 銘「ひねくれ者」

和泉野窯茶碗 銘「足つくり」

方面で活躍していました。大亀和尚の長寿ぶりに驚かれた方が多くいらっしゃいました。しかし、僅か一五年前といえども、堺でも知らない方が多く、今回の展示は大亀和尚及びその功績を知ってもらう、良い機会となりました。

天下の大茶人・千利休を生み出した堺は、茶の湯の位置付を大きく変え、政治的にも文化的にも大きな役割を果たしてきました。茶の湯は今、総合芸術といわれて、日本文化の中心を担っています。大亀和尚の足跡を通して、堺における茶の湯の歴史を知ることがいかに重要か、また大亀和尚が我々に残した茶の湯の名所の価値について改めて見直していただき、堺の茶の湯及び、その歴史に興味を持っていただく機会になれば幸いです。

なお末筆となりましたが、一般財団法人大亀和尚民芸館をはじめ、ほんとうに多くの皆様にご尽力・ご協力を賜りましたこと、この場を借りまして、こころより感謝申し上げます。

千利休茶の湯館 学芸員 木村栄美

企画展

与謝野晶子著『新訳源氏物語』完成80年記念 『源氏物語』を解き明かす晶子

令和元年11月2日(土)～12月15日(日)



令和元年は、与謝野晶子著『新訳源氏物語』完成から八〇年の節目の年でした。

紫式部を恩師として尊敬し、「源氏物語」を「日本精神の大きな本源」として高く評価して

いた晶子は、生涯に三度も「源氏物語」の現代語訳を手掛けました。三度目の訳が昭和十三年（一九三八）から翌年にかけて『新訳源氏物語』全六巻として刊行され、その三年後に晶子がこの世を去ったため、『新訳源氏物語』は晶子にとって最後の大作となりました。

晶子は、少女時代から「源氏物語」だけでなく、「采女物語」「大鏡」「増鏡」「枕草子」など数多くの古典文学を読みふけり、それらは、晶子の中で蓄積され、彼女の作品や生き方に影響を与えました。また、『日本古典全集』を刊行するなど、生涯にわたって古典文学を研究し、「源氏物語」の現代語訳をライフワークとしました。

本展では、晶子が少女時代から最晩年にかけてその情熱を注いだ「源氏物語」の魅力を、『新訳源氏物語』の自筆草稿や、各巻を歌に詠みこんだ「源氏物語礼讃」歌から解き明かしました。晶子がいかに「源氏物語」を愛し、未来永劫に読み継がれるために心血を注いでいたかを知っていたただく機会となりました。

第一章 晶子の古典創作『新訳源氏物語』

晶子が最初に古典の現代語訳を手かけ、刊行したのは『新訳源氏物語』です。また、最も愛読していたのも「源氏物語」でした。明治四五年（一九一〇）刊行の『新訳源氏物語』は、原作を「細心に、また大胆に」抄訳したものでした。

一〇代で古典の代表的作品を、分らないながらも「独学」で何度も読んでいくと、自然にはつきりと分かるようになっていくのが嬉しかったと述べています。晶子がこのように早くから古典の代表作をほとんど暗記するほど「独学」できたのも、父や祖母の蔵書が家の蔵にたくさんあったからでした。

大正初期には、「采女物語」や「徒然草」「紫式部日記」「和泉式部日記」の現代語訳本、夫の寛と共著で「和泉式部歌集」の評釈を立て続けに刊行します。また、書籍だけでなく、「平家物語」の歌帖や「竹取物語」の巻物、そして「源氏物語」の各帖を歌に詠んだ「源氏物語礼讃」の歌帖や短冊など、さまざまな形で古典関係の作品を創作しました。これは、ひとえに晶子が少女時代に培った古典の独学によるものでした。

第二章 読み継がれる「源氏物語」

「源氏物語」は今から千年以上前に作られた世大正十一年（一九二二）一月号の雑誌『明星』に「源氏物語礼讃歌」と題した短歌を発表し、『新訳源氏物語』各帖の冒頭にも掲載しました。そして『新訳源氏物語』完成を記念して「源氏物語礼讃」の歌短冊や巻物を百巻限定で制作し頒布したのです。

五四首の中には大正期と全く異なっている歌もあり、二〇年を経て読み直された「源氏物語礼讃歌」は、晶子の人生の深まりとともにより洗練され輝きを放っています。また、これらを各帖の冒頭に入れることで、物語世界への誘いのような役割を果たし、内容が読みやすくなっています。

本展では、与謝野晶子倶楽部と堺市博物館との共同研究の成果を発表するコーナーも設置しました。晶子の『新訳源氏物語』草稿をどのように翻刻しているかを説明するパネルや、現在翻刻作業を行っている「桐壺巻」の草稿を展示し紹介しました。また、堺市博物館が所蔵している草稿五六二枚すべてを積み上げてその量の多さを知らせる展示を行ったことで、晶子の源氏訳にかける情熱を感じていただけました。

界で最初の長編小説です。「源氏物語」をはじめとする古典作品は、「写本」や「版本」によって流布し読み継がれました。晶子も少女時代から「湖月抄」などの版本に親しみ、「源氏物語」の現代語訳のために絵入版本を愛読していました。

晶子は、「源氏物語」について「我國のどの芸術にも、また我國の趣味生活一般にも、この物語が直接間接に影響している」と述べています。そして、「紫式部の言語の美を離れて源氏物語は存在しない」とし、「原作を読むための手引書」として現代語訳を行いました。

その後も「源氏物語」は、多くの作家や歌人たちによって現代語に訳され、外国語訳も刊行されるなど、今後も広く読み継がれていくでしょう。晶子はまた、多くの古典普及活動にも大きく貢献しました。夫寛・正宗敦夫と共に『日本古典全集』を刊行し、多くの日本人に古典作品を手軽に安価で読む機会を作りました。

第三章 最後の大作『新訳源氏物語』の完成

今から八〇年前に『新訳源氏物語』は完成しました。

晶子は生涯に三度も「源氏物語」の現代語訳に挑戦しています。最初に刊行した『新訳源氏物語』の訳に納得できず、再度挑戦したいと思いながら明治四二年（一九〇九）から執筆していた「源氏物語講義」の原稿が関東大震災で焼失し落胆します。その後、昭和十一年（一九三六）に最愛の夫寛が急死し二年程中断するといった悲しみを乗り越え、ついに昭和十四年（一九三九）に『新訳



「源氏物語礼讃歌」～「源氏物語」普及のため～

晶子は、一七歳の頃、すでに源氏の各帖を歌に詠んでいました。その後、大正六年（一九一七）になって、友人の小林二三宅で上田秋成他筆「源氏物語五十四首短冊貼交屏風」を見て触発され、あらたに「源氏物語」の各帖を詠んだ「源氏物語礼讃歌」の短冊や歌帖を制作しました。当初は、親しい人たちに贈るつもりで作りましたが、

本展は、与謝野晶子だけでなく「源氏物語」に興味のあるお客様も多く来館いただくことができ、年齢層も様々でした。「源氏物語礼讃歌」の草稿ノートが初公開ということ



顔出しパネル
撮影コーナー





与謝野晶子は、その夫である与謝野寛（鉄幹）と力を合わせながら、日本近代文学の歴史を牽引する創作活動を行ってきました。その活動は、二人も育児と並行して行われました。日々の暮らしは経済的に見ても、ゆとりのない状態でしたが、晶子の才能に魅了された実業家たちが多様な形で手を差し伸べ協力を惜しみませんでした。

本展では、晶子の輝かしい業績のベースにある、晶子を支えた人々の思いや支援活動について三人の実業家小林天眠・川勝堅一・小林逸翁にスポットをあてて紹介しました。

こうした晶子の支援者と言える実業家についてパネルを用いた人物紹介や関係深い資料の展示により、晶子との交流を明らかにしました。
（与謝野晶子記念館 学芸員 高田晃成）



千利休茶の湯館では、今年度次の二点を試みました。

一つは堺環濠都市遺跡の出土品に、使用用途や材質、描かれた文様など、見どころを明記したキャプションをつけました。出土品については、必ずしも茶道員だけでなく、何に使用されていたのかわからないものも多いのですが、一七世紀初頭、堺で使用されていた道具には間違いはなく、唐物、南蛮物はもとより、まだまだ流通していなかった国産のものが多く出土しています。それは堺の文化が、当時の最先端を取り入れていたことを窺わせています。またそうした資料に刻まれた被災痕や出土状況は、慶長二〇年（一六一五）、大坂夏の陣における戦火のすさまじさを物語っている貴重な証拠でもあります。国際文化都市であり、二度の大きな戦火を体験した堺が歩んできた歴史変遷を、皆様により一層理解していただけるよう、今後も身近でわかりやすい展示を行っていきたくと考えています。

もう一つは、企画展に伴った関連コーナーを設けました。今年度は、令和元年一月二日から二月一五日に開催されました企画展「源氏物語」を解き明かす晶子」に関連して、『源氏物語』から生み出された美意識に関連したものと、千利休の師の一人とされる武野紹鷗の茶の湯を象徴する歌から、『源氏物語』と茶の湯との関連性を示す文献を展示しました。



千利休と与謝野晶子、時代は異なるといえども同じ堺の地に生まれており、文学とお茶は深い関係があります。今後もそうした堺の文化という視点から、企画展に関連した資料を常設展で展示していく予定です。

与謝野晶子記念館では、「今月の作品」と題して、季節や企画展に合わせた晶子自筆資料を中心に、毎月入れ替えを行って展示しております。
（木村）

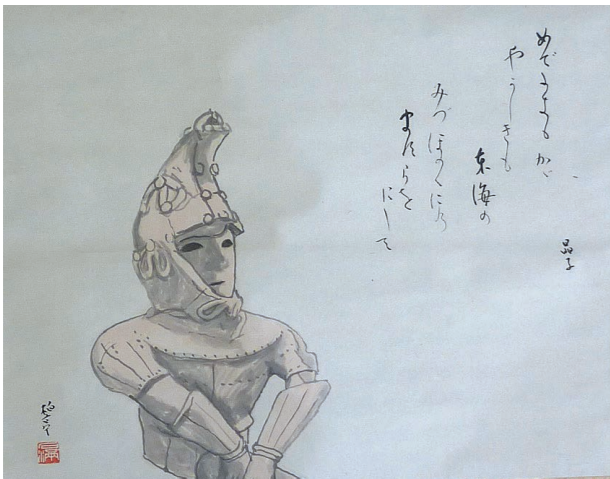
◆与謝野晶子記念館◆

「与謝野晶子特別資料展」初公開資料を紹介！

貴重な初公開資料を三期にわたって展示しました。それぞれの資料は晶子とゆかりのある方々が所蔵しておられ、それにまつわるエピソードと合わせて紹介しました。

【第一期】令和2年1月22日(水)～2月17日(月)

●晶子歌掛軸 石井柏亭画 与謝野光氏旧蔵
めでたきもかゞやかしきも東海の
みつほのくにのますらをにして 晶子
晶子が最晩年に詠んだ歌で、昭和十六年（一九四一）二月二七日刊行の雑誌『冬柏』(とうは



く)に発表後、遺稿歌集『白桜集』に収録。絵は、雑誌『明星』の同人であり友人の画家・石井柏亭が描いた武人埴輪です。百舌鳥古市古墳群が世界遺産に認定された記念に、与謝野家よりご寄託、展示をご快諾いただきました。

【第二期】令和2年2月19日(水)～3月16日(月)

●晶子が孫の初節句に贈った木目込み雛人形と
晶子自筆歌掛軸(白蘭の) 堺市博物館蔵
晶子の五女エレンヌの娘(晶子の孫、昭和十四年（一九三九）七月生)の初節句に、晶子が東京高島屋から贈ったものです。
晶子自筆歌掛軸の歌は、
「白蘭(びやくらん)の書のごとくあてやかに雛のはかまはふくらめるかな 晶子」(歌集『太陽と薔薇』収録)
晶子の御令孫よりご寄贈いただき、このたび初めてお雛様の季節に合わせて初公開しました。

【第三期】令和2年3月18日(水)～4月20日(月)

●晶子最晩年の百首屏風(海ごひ) 個人蔵
晶子の初期から晩年にかけて詠んだ歌一四八首を自選し書いた屏風。右隻に七一首、左隻に七七首。昭和十五年（一九四〇）三月に揮毫したものです。高知県の旧家である森木家の楠正氏（伊野町長などを歴任、故人）が晶子に書面で歌屏風の揮毫を依頼し作られたもの。全歌集のうちほぼ各歌集から代表的な歌を自選して書いたも

ので、晶子の歌の集大成といえる貴重な内容です。また、晶子が半身不随になる二か月前に作られたことから、最後の百首屏風であると思われる。

◆千利休茶の湯館◆

【第二期】と【第三期】には、「利休忌」にちなみ、堺ゆかりの千利休の資料を展示しました。

第二期以降、会期中スタンプラリーを開催しました。スタンプを集めた方には、竹久夢二イラスト入のポストカード、利晶の杜関連図録をプレゼントさせていただきました。

(森下)



企画展 生誕二〇年
立花大亀と茶の湯 ―三世紀を生きた堺の禅僧― 記念講演会

9/21(土) 芳澤勝弘氏(花園大学国際禅文化研究所顧問) 講演会
「堺ゆかりの禅僧と茶の湯」



花園大学国際禅文化研究所顧問の芳澤勝弘氏を講師にお迎えして、ご講演いただきました。茶の湯は禅と深い関わりを持つといわれてきました。堺は、茶の湯発展において重要な位置づけにあり、千利休をはじめ多くの茶人を輩出してきました。彼らは大徳寺派の禅僧に参禅し、帰依しています。しかし、堺における禅僧の活動がどのようなものであったのか、堺とどうかわっていたのか、という点については意外と知られていません。

本講演では、堺に足跡を残した禅僧をほぼ網羅し、自治都市堺において茶の湯が隆盛した歴史的背景を探りながら、禅僧と堺の豪商との関係性についても、わかりやすく楽しくお話しいただきました。ご講演の中で、堺に大徳寺派の足掛かりを作った、とんちで有名な一休さんご一休宗純とその兄弟子・養叟宗頤から始まり、千利休、今井宗久、津田宗及等、堺の茶人が参禅した南宗寺の開山・大林宗套、利休の秘伝書といわれた『南方録』に関わる南坊宗啓、沢庵漬で有名な沢庵宗彭、堺屈指の豪商・天王寺屋津田宗及の次男・江月宗玩等、一度はその名を耳にしたことがある人物が多数登場しました。これまで禅は難しくするという理由で敬遠されがちな世界でしたが、あらためて深く興味を持たれた方々がたくさんいらっしゃいました。芳澤氏にはぜひまた、堺における禅の普及状況や茶の湯との関わりについて、続編としてより深いお話をいただきたいと考えています。(木村)

11/23(祝・土) 神野藤昭氏(跡見学園女子大学名誉教授) 講演会
「『新新訳源氏物語』はどのようにして生まれたか」



講師に、跡見学園女子大学名誉教授の神野藤昭氏をお迎えして、ご講演いただきました。碁子が、どんなテキストを傍らに置いて、どんなふうに『新新訳源氏物語』を書きすすめたのかについて、詳細な資料をもとにお話しいただきました。『新新訳源氏物語』がいつどんな事情で書き始められ完成に至ったかについて、いくつもの資料を用いて丁寧に説明されました。また『新新訳源氏物語』の本文を、依拠テキストと思われる河内本や定家本などと比較しながら探るお話は、「多大な資料をもとに導き出されたことがうかがえた」や「碁子の源氏訳の使用原文をめぐる検討をおもしろく聞かせていただいた」と受講者の方々に大変好評でした。ほかに、「メリハリがあつてとてもわかりやすかった」や「素人にもわかりやすい話し方でききとりやすかった」といった神野藤氏のお話に変満足されている方が多くいらっしゃいました。神野藤氏には、与謝野碁子記念館の前身である「与謝野碁子文芸館」でも碁子の源氏訳についてご講演いただいておりますが、このたびのご講演により、あらためて碁子の源氏訳を最もよく研究されていることを再認識する機会となりました。なお、この講演録は、与謝野碁子倶楽部との共同研究をまとめた報告書に収録され、本年度中に刊行予定です。(森下)

企画展 「源氏物語」を解き明かす碁子 記念講演会

与謝野碁子倶楽部との共同調査研究

今年度は、企画展「源氏物語」を解き明かす碁子の開催にあたり、堺市博物館が所蔵している碁子の『新新訳源氏物語』の草稿を、与謝野碁子倶楽部に関する学識経験者、および堺市博物館学芸員で研究し、その成果を企画展で展示しました。また、本会議である共同研究会議に加えて、源氏部会という形で先生方に集まっていたいただき、より良い研究成果を残せるよう話し合いました。



太田登氏(与謝野碁子倶楽部会長・天理大学名誉教授)、中周子氏(大阪樟蔭女子大学教授)、加藤美奈子氏(就実短期大学准教授)、松浦あゆみ氏(京都女子大学非常勤講師)、山下奈津子氏(和歌山市立博物館学芸員)、足立匡敏氏(甲陽学院中学校・高等学校教諭)、竹田芳則(堺市立北図書館館長代理・司書)、フィットレル・アロン氏(日本学術振興会外国人特別研究員)の八名の先生方にご参加いただきました。

六月一四日に、第一回会議を行い、昨年度の会議を振り返り、今年度の展示計画について話し合いをしました。その上で「源氏物語」の草稿の内、研究のテーマとして定めた「桐壺巻」の翻刻について分担を決めました。

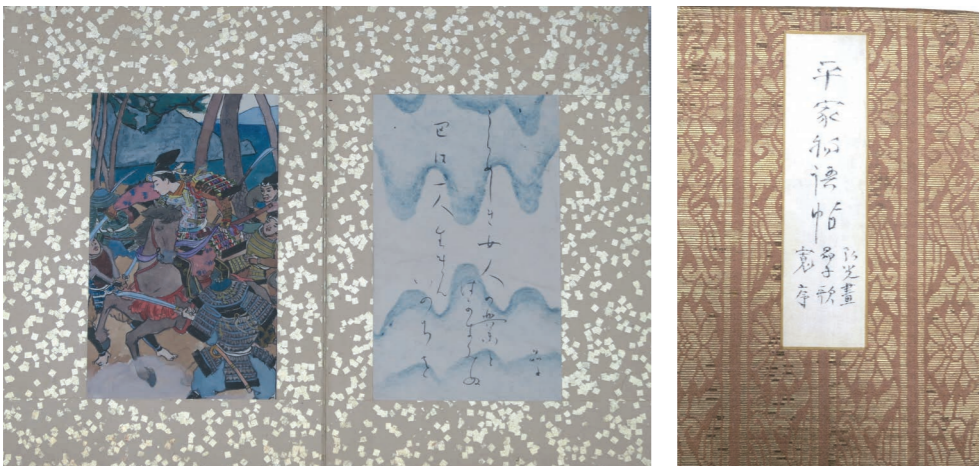
第二回会議は一〇月一八日に行い、企画展「源氏物語」を解き明かす碁子について、共同研究

に関する資料をどのように展示するかを企画展の内容を決めました。本年度末までに、「桐壺巻」

の翻刻をはじめ、研究についての成果を「報告書」にまとめ刊行します。(高田)

平成31年度 新収蔵資料の紹介

本年度は、総数三品の寄贈がありました。



●折本「平家物語」

与謝野碁子筆・歌、与謝野寛筆・序文、中澤弘光画 大正八年秋(一九一九)

与謝野寛の題字と序文に、碁子の短歌小色紙と中澤弘光の絵小色紙を配した帖仕立ての美品。「平家物語」の場面を詠んだ歌と絵が描かれています。

この折本は、小説家の吉川英治が偶然古書店で購入したものの(吉川英治全集)第四巻、昭和四四年(一九六九)講談社刊より)吉川英治記念館で所蔵していましたが、昨年三月に同館が閉館したため、堺市に活用してほしいと寄贈していただきました。寄贈後、企画展「源氏物語」を解き明かす碁子」において当館で初めて展示公開しました。なお、堺市博物館では、昭和五九年(一九八四)開催の特別展「与謝野碁子」で展示しています。

●碁子自筆歌短冊(ほを上げぬ)一枚

大正一四年(一九二五)〜昭和三年(一九二八)ごろ 「ほを上げぬ薄ゆたかにまろければ松にまされりうら山の夏碁子」歌集「心の遠景」収録歌。碁子と交流があった友人より、所蔵者の祖父が受け取られたもの。

●碁子自筆歌百首屏風(鼓より)二曲一雙

昭和一〇年(一九三五)〜二一年(一九三六)ごろか 歌数 約七七首(右隻約四〇首、左隻約三七首) 収録歌集は、「火の鳥」から遺稿歌集「白桜集」(右隻)

「鼓より笛のはやしに移りたるあられのうちの初春の雨」歌集『流星の道』収録歌 (左隻)

「山風が月見草をばかへり見て少しやさしくなりにけるかな」所蔵者の祖父が与謝野夫妻の子どもの仲人をした縁で所蔵されていたもの。(森下)

開館5周年をむかえたさかい利晶の杜

須藤 健一
堺市博物館館長

☑ はじめに ☑

さかい利晶の杜は堺生まれの偉人・千利休と与謝野晶子を顕彰する歴史館・文学館として平成二七（二〇一五）年三月に堺区宿院町に開館しました。近くには千利休屋敷跡や与謝野晶子生家跡があるゆかりの地です。利晶の杜は常設展示と企画展示、多彩な催しや事業、さらにはボランティアの皆さまが観光案内を行う多機能施設です。当館の管理運営は指定管理者が、学芸部門は堺市博物館が担っています。開館五周年を機に当館の博物館活動のあゆみを紹介いたします。

☑ 常設展示と茶の湯体験 ☑

利晶の杜は一階の千利休茶の湯館と二階の与謝野晶子記念館の常設展を軸に、二人に関連するテーマを深掘りする企画展で構成されます。当館の特徴をいかして三千家（表千家、裏千家、武者小路千家）の元元のご協力により椅子と机で呈茶を楽しめ、三千家の茶室（各八畳の広間）ではお点前も体験できます。そのほか、二畳の「さかい待庵」と四畳半の「無一庵」



の茶室が設けられています。また、指定管理者によるユニークな催しもあります。

千利休茶の湯館は、利休の時代から現代までの茶の湯の歴史を「千利休と堺のまち」「千利休と茶の湯」「千利休とその後」の構成で展示しています。ここでは、千利休が国際貿易都市堺で大成した茶の湯、利休好みの茶道具と「市中の山居」、千家の系譜と千家十職をおして茶の湯の興隆を紹介しています。また、四〇〇年前に焼失した堺環濠都市から出土した茶器の展示も見逃せません。当館は映像、ジオラマやパネルを活用し、千利休シアターでは樂家第十五代樂吉左衛門（現・直入）さんが茶の湯の真髓を語ってくれます。

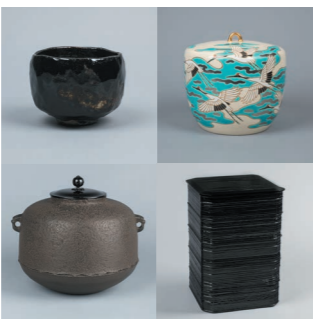


与謝野晶子記念館は、明治・大正・昭和を生きた多彩多能な歌人・晶子の豊かな芸術性を「晶子の表現世界」「晶子の心の風景」「晶子のふるさと堺」の三章立てで表現します。晶子の作品からメッセージを読み解き、国内外へ旅する晶子の新しい世界との出会いと創造世界、そして西洋の香りが

を移築するなど、堺の茶の湯復興に尽力された堺生まれの禅僧の生涯を紹介しました。

三千家と利晶の杜との連携については、「寿ぎの品々」と「千家十職」の展示を行いました。ここでは、開館一周年記念として表千家から寄贈された「流水扇面絵茶碗」と三千家からの茶室軒号の掛け軸を陳列しました。さらに、千家十職の各職家から寄贈された茶道具を特別陳列する機会に恵まれました。この幸運は堺ライオンズクラブ設立六〇周年記念事業として堺の茶の湯の発展をめざし、三千家元と千家十職のご協力により実現したものです。

茶道具は「瑞雲」「二鶴水指」「黒染茶碗」「尻張金」「元伯好 縁高」など一〇品で、いずれも各職家が制作した現代の逸品です。



「自分の感激を歌いたい」と短歌で自分の感情を歌い続けた晶子の歌人としての生涯は、「与謝野晶子」「与謝野晶子と三つの舞台」「与謝野晶子の満蒙旅行」などの企画展において詳細に紹介しました。古典研究者としての晶子は少女時代から古典に読みふけり、『源氏物語』は暗記するほど愛読したといわれます。この古典文学への関心は、



する生家で育まれた文学への感性などを丁寧に展示しています。また、再現した駿河屋の帳場で晶子の生いたちを知り、自作短歌を朗読する晶子の肉声を聞けるなどの表現世界が体感できます。さらに、晶子の未公開資料を五周年記念展示で紹介いたします。

☑ 企画展のねらい ☑

千利休と与謝野晶子に関連する研究成果を公開する企画展にも力を傾注し、五年間で一六回開催しました。

千利休関連の企画展は、茶の湯の歴史と三千家との連携のテーマにそっての展示です。茶の湯の歴史では、「まちを掘る」「天下をめざす」「近代の茶の湯」「茶の湯の復興」と「立花大亀と茶の湯」を開催しました。天下の茶頭として大成した茶の湯は、江戸時代に家元制度と大名家の茶道指南役として隆盛しました。しかし、明治維新により家元は大名の茶道職を失い茶人人口も激減しました。この苦難に三千家宗匠が手を携えて茶の湯の復興に努力を重ねたすがたを、書・軸・茶道具・立礼式、献茶式や地方への普及活動などをとおしてリアルに表現しました。「立花大亀と茶の湯」展においては堺市博物館創設時に黄梅庵と伸庵の茶室

企画展「万葉集の人間主義」で表現され、晶子らを選歌した近代短歌集『新万葉集』の時代を越える「和歌の力」が強調されました。

『源氏物語』の現代語訳は関東大震災で草稿を焼失した不運にもめげず、亡くなる三年前に『新訳源氏物語』に結実させました。企画展『源氏物語』を解き明かす晶子』では、読み継がれていくための現代語訳に心血を注いだ晶子の情熱が描かれています。

晶子関連資料の企画展「利晶に探る和謝野晶子コレクション」は、与謝野晶子倶楽部、晶子研究者と堺市博物館の共同調査研究の成果公開の展示でした。当館は従来から晶子関連資料を集めてきましたが、開館以降は質の高い資料が寄贈されるようになりました。主な収蔵資料は、鳳家・駿河屋旧蔵資料、川勝堅一資料、与謝野家などからの晶子旧蔵資料、富村俊造資料などです。



☑ 利晶の杜のこれから ☑

さかい利晶の杜は芽吹いてから五歳になります。大きな木に成長してきています。常設展示では新着資料、寄贈品や未公開作品などを既展示品と入れ替えて新鮮な雰囲気をかもし

出しています。ただ、千利休茶の湯館に関しては伝統的な茶道具の収蔵が少ないことから収集活動がこれからの大きな課題です。三千家や千家十職の職家から寄贈いただいた茶道具は、常設展示場で通年展示しています。さらに、これらの茶道具を活用して入館者に触れてもらえる茶会などのイベントを行う予定です。

与謝野晶子記念館に関しては、今後も膨大な晶子関連資料の翻刻・解釈などを共同調査研究会ですすめ、その成果を展示だけでなく、図録や報告書などの作成をおして広く公開します。

現代の日本では茶の湯や短歌からの若者離れが加速しているように感じられます。さかい利晶の杜のミッションは、市民や多くの団体の方々協力のもとに子どもと若い世代が茶道と詩歌にいつそ目を向けるような魅力ある展示や催しを企画・実践していくことです。そして、日本文化に憧れる海外からの訪問者にも感動をあたえる場国際観光文化都市・堺の役割を果たせる博物館にすべく努力いたします。今後とも皆さまのさらなるご支援とご協力をお願いします。

参考文献

堺市博物館

- 『与謝野晶子 その限りのなき挑戦の生涯』二〇一五年一〇月
- 『万葉集の人間主義―木安な未来への希望を求めて』二〇一七年一〇月
- 『千家十職―利晶で愛する伝統の技と美』二〇一八年六月
- 『茶の湯の復興―幕末・明治の千家茶道を中心に』二〇一八年九月
- 『利晶に探る和謝野晶子コレクション』二〇一八年二月
- 『立花大亀と茶の湯―二世紀を生きた堺の禅僧』二〇一九年九月
- 『源氏物語』を解き明かす晶子二〇一九年一二月
- 吉田 豊「堺の国際性日本美―さかい利晶の杜展示館の企画・設計」
- （堺市博物館 研究報告）第五三号、一九三〇頁、二〇一六年三月